ISSN 0388-4732

石川県白山自然保護センター普及誌

はくさん

第 38 巻　第 4 号

目 次

P 2　白山で長距離季節移動を続けるニホンザルの群れ
上馬　康生

P 6　白山の歴史時代の噴気活動
東野外志男
田島　靖久

P10　郵便集配の山道
～昭和 28 年の郵便図を見る～
林　　哲
佐川　貴久

P14　はくさん
山のまなび舎だより
谷野　一道
松崎　紀子

木の枝にとまるヒレンジャク

鳥による種子散布　半寄生植物ヤドリギ ～白山麓～

冬の山でブナ、ミズナラ、クリなどの広葉樹の葉が落ちたあとに緑色のこんもりした、遠目に鳥の巣？とも思えるものが、着いている様子を見ることができます。これが、ヤドリギです。名前（宿木）の通り、樹木の幹や枝に寄生し、その宿主になる木の水分やミネラルを吸い取って生きています。自分で光合成をすることができるので、正確には半寄生植物といえます。

半分は、他人？のお世話になり、ちゃっかり生活していますが、子孫を増やすのにも鳥のお世話を頼りにしています。冬鳥のヒレンジャクなどが渡ってくる 11 月中旬ごろから黄色の果実（橙赤色の果実をもつものはアカミヤドリギ）が熟し始め、えさとして果肉を食べてもらい、糞として種子を排出してもらっています。種子は粘性のある物質で包まれ、樹木にくっつき発芽します（詳しくは、「はくさん」37 巻 3 号をご覧下さい）。樹木の葉が落ちて、鳥から見つけてもらいやすい時期に果実を実らせるのもちゃっかり者の戦略の一つかもしれません。

（吉本敦子）

白山で長距離季節移動を続けるニホンザルの群れ

上馬　康生（石川県白山自然保護センター）

白山のニホンザル（以下サルとします）の群れの中に季節移動するものがあることは、1960 年代後半の調査で分かっていました。私は 1990 年代の初めに、5 月から 11 月ころにかけて、毎月 1 回、中宮道登山道を登り、周辺のサルの群れの分布と食べ物を 3 年間調べました。そこには 3、4 の群れがいて、夏にはブナ帯から亜高山帯に上がり、秋に麓に降りてくることを確認していました。しかし、具体的にどの群れが、いつどのように移動しているのか、冬はどこにいるのか等は不明で、当時から発信機による調査の必要性を感じていました。

写真１　冬のニホンザル

2006 年 9 月下旬から 11 月上旬に白山市河原山町で捕獲され、発信機を装着した 3 頭の雌のオトナザルが入っている群れ（タイコ A4-2 群）が、2007 年 6 月の調査時に大きく位置を変えていることをみつけ、この群れを追跡することにしました。約 3 年間、通常は週に 2 回の調査で群れの位置をおさえ、夏には中宮道を登山して群れのいる標高 2,000 m前後の現地へ出向いて調べました。そして、季節ごとの生活場所や移動の時期とルートを明らかにし、何がその引き金となるのか等を考えてみました。

春の移動は芽吹きに影響される？

3 年間の調査で春の移動開始は、いずれの年も 4 月 10 日前後から 20 日過ぎまでの間であり、大きな違いはみられませんでした。しかし移動を開始してからの行動は異なっていて、中ノ川に到達したのが 2007 年は 6 月 11 日から 18 日の間であったのに比べ、2008 年は 4 月 21 日から 5 月 1 日の間、2009 年は 4 月 23 日から 28 日の間と共に約 1 か月半早くなっていました。その後も 2008 年と 2009 年は同じような行動をしていて、4 月下旬から 5 月中旬に中ノ川入口右岸の芽吹き始めの急斜面の草原（高茎草原）と周辺のブナなどの林に滞在し、5 月下旬から 6 月上旬には中ノ川中流のゴマ平西方斜面に達していました。

白山地域ではサルやクマなどの春の食物として、アザミ類やシシウドなど高茎草原の植物が重要であることが分かっていますが、その芽吹きや生長具合は積雪状況や気温の影響を受けると考えられます。そこでタイコ A4-2 群の行動圏の中間に位置する白山自然保護センターブナオ山観察舎の、3 年間の消雪日と 4 月 1 日から 5 月 6 日までの 9 時の気温の積算気温を調べてみました (表 1)。それぞれ 2007 年が 3 月 31 日で 384.5 度、2008 年が 4 月 9 日で 450.0 度、2009 年が 4 月 3 日で 439.5 度でした。消雪日は 3 年間で大差はないといえますが、2007 年の積算気温は他の 2 年と比べて日平均にして 1.5 度、1.8 度低くなっていました。ブナオ山斜面の草原の写真の記録からも、2007 年は他の 2 年より芽吹きが遅れていることが分かっていて、十分な食物がまだなかったことが移動を遅らせた要因となった可能性が考えられます。しかし、いつもそうなのか判断するには、もう少し他の年の観察が必要と思っています。

移動ルートについては、移動開始から中ノ川に達するまでの途中の記録が少なく、特に開始直後のルートが不明ですが、3 年間とも同じルートを移動したものと仮定して発信機の即位点またはサルの

表１　４月１日～５月６日の積算気温と移動時期

	積算気温	移動開始	中ノ川到着
2007 年	384.5 度	4/13 ～ 23	6/11 ～ 18
2008 年	450.0 度	4/9 ～ 15	4/21 ～ 5/1
2009 年	439.5 度	～ 4/23	4/23 ～ 28

群れの目撃記録から推定すると、尾添川左岸を上流へ移動し一里野温泉の尾添川斜面からオメナシの谷を上がり、丸石谷入口付近を渡って中ノ川を渡り右岸に達し、斜面を上流へ移動して夏期の生活場所へ到達していると推定されます。今後 4 月中旬の調査を詳細に行なえば、この時期の移動ルートをより明らかにできると考えています。

夏期の生活場所はブナ帯上部から亜高山帯

夏期に最も標高の高いところで記録されたのは、2008 年 8 月 5 日の標高 2,160m でした。そこは夏にはハクサンフウロやニッコウキスゲなどの高山植物が咲くところです（写真 2)。2008 年、2009 年の調査では、登山道沿いでサルによる高山植物の採食については確認できませんでしたが、食べていてもおかしくありません。サルの群れの行動としては、中宮道の尾根および両側の斜面の、尾根より標高差 300 m以上下ったところまでを行動していることと、2008 年 8 月 5 日から 6 日の間に少なくとも直線距離で 3km 以上を移動したことが分かり、かなりの距離を移動しながら食物を探していると考えられました。生息環境としてはブナ帯上部から亜高山帯、高山帯におよぶ範囲で、ブナ、ダケカンバ、オオシラビソなどの高木林のほかに沢筋や斜面に高茎草原があり、ササ原や高山植物の草原もあることから、夏から秋にかけてはサルにとって様々な食物が得られる場所となっていると思われます。

秋の移動はブナの実の作柄が影響する

夏の生活場所からの移動開始は、2007 年が 10 月 15 日から 21 日の間、2008 年が 8 月 28 日から 9 月 11 日の間、2009 年が 10 月 9 日から 16 日の間でした。3 年とも移動した後、シナノキ平から湯谷頭付近に滞在あるいはそこを通過して下っていき、一里野温泉スキー場山頂付近を通過した日から 2 日～ 4 日以内に河原山町から仏師ヶ野町の冬の生活場所へ降りてきていることが明らかとなりました。

近年は、木の実のなり方とツキノワグマの出没の関係を調べる目的で、ブナ、ミズナラ、コナラの実の作柄状況が調査されています。タイコ A4-2 群の行動圏である尾添川流域の作柄を示すと表 2 のようになっていました。中宮道ではブナが広い範囲に林を作り、原生的な林も多いことから、ブナの実の作柄とサルの群れの移動時期との関係をみてみました（表 2)。凶作であった 2008 年の移動時期が 3 年の中では最も早く 9 月上旬ころであり、2007 年（並作）や 2009 年（豊作）の 10 月中旬と比べて 1 か月以上も早くなっていました。以前の調査で、ブナの実が大豊作であった 1990 年には、11 月 16 日になっても湯谷頭付近の標高 1,400m から 1,190 mにかけてサルの複数の群れを見ており、2007 年や 2009 年と比べると約 1 か月遅くまで標高の高いところにいたことになります。どうやら、秋の移動開始を決めるのは夏期の生活場所付近のサルの食物の有無や量が大きな要因と考えられ、中でもブナの作柄が大きく関わっているようです。群れが移動を開始して、途中のシナノキ平から湯谷頭付近でしばらく滞在していることが分かっていることと、この付近にかけてもブナが多いことからブナの実の豊作年には中宮道の尾根に長く留まっていることが考えられます。一方 2006 年のブナは大凶作であり、タイコ A4-2 群のサルが河原山町で 9 月 27 日に捕獲されていることから、この時すでに群れが降りて来ていたことになり 4 年間では最も早くなっていました。

表 2　ブナの実の作柄と移動時期

	ブナ	移動開始	冬期生活場所到着
2006 年	大凶作	?	9/27 以前
2007 年	並　作	10/15 ～ 21	11/2
2008 年	凶　作	8/28 ～ 9/11	10/3 以前
2009 年	豊　作	10/9 ～ 16	10/21

写真２　最高到達地点の景観

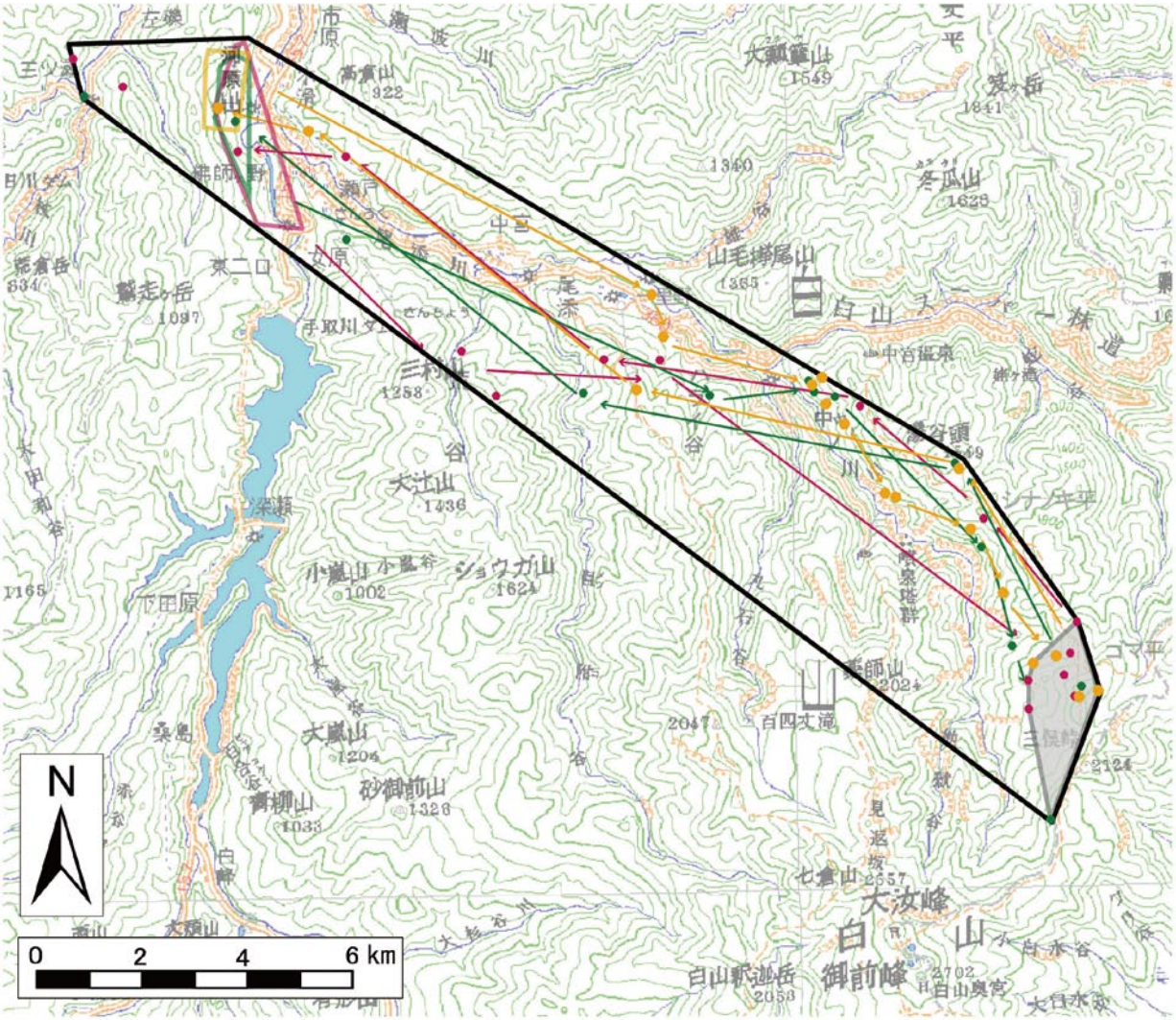

図１　タイコ A4-2 群の 2006 年 9 月～ 2009 年 12 月の冬期生活場所、夏期生活場所、移動ルート、行動圏
国土地理院発行 20 万分の 1 地形図「金沢」を使用。

３年間の測位点と目撃記録から移動ルートを推定すると、夏期の生活場所から中宮道の尾根沿いに下り、湯谷頭付近を通過後、中ノ川入口付近で左岸へ渡り、一里野温泉スキー場山頂付近の落葉広葉樹林を通過して目附谷へ入り、尾添川を渡って右岸沿いに下流へ移動し、手取川との合流点付近から冬期の生活場所へ到達していると考えられます。春の移動は途中の高茎草原で滞在しながら高度を上げていましたが、秋は中宮道の尾根や一里野温泉スキー場上部のブナ林やミズナラ林などを通過していることからも、両季節で食物のある場所が異なることから別のルートをとっていると考えられます。もう一つ興味があるのは、この移動ルート周辺にはサルの群れが 10 前後いることが分かっていて、これらの群の間をぬって短期間に移動しているのです。

集落近くの林が冬期の生活場所

冬期の生活場所は、河原山町の集落の裏山から仏師ヶ野町にかけての範囲を中心としていました。しかし、一時的に手取川流域から尾根を越えて大日川流域の本流まで、直線距離で約３～ 5km を往復していることが分かりました。この移動は一時的なものと推定されますので、冬期の生活場所には含めませんでしたが、今後の調査で冬期の生活場所が変化したり範囲が広がったりする可能性があります。冬期の生活場所の環境は、コナラやケヤキなどの落葉広葉樹林とスギ植林地が多く、低地には集落と周辺の水田や畑地があります。秋には畑に被害を与えることがありますが、冬は雪深い林の中や急斜面の雪崩あと等で食物をさがして生活しています。

写真３　冬期生活場所

まとめ

秋に低標高地へ移動してきた後、翌秋に再び戻ってくるまでを１年として、移動ルートとともに３シーズンを色分けして示すと図１のようになります。夏期の生活場所については、３年とも８月に行なった３日間の現地調査の他は、遠距離からのおおよその位置しか分かっていないことから、年ごとの区別をしないで３年間を合わせたもので示しました。タイコ A4-2 群は白山地域のサルの群れの中では最も長距離の季節移動を繰り返していること、他の多くの群れのいる中を標高 200 mから標高 2,160 mまでの標高差 1,960 mを直線距離で最大約 23km 移動していること、その春と秋の移動ルートおよび夏期と冬期の生活場所の概要などが明らかとなりました。３年間を合わせた行動圏の面積は 72.8km²となり、白山地域では最も広い範囲を行動している群れと思われます。移動ルートは春と秋では異なっていて、それらは季節ごとのサルの主要な食物の分布状況と一致していると考えられます。夏期の生活場所からの移動開始時期はブナの実の作柄と関係している可能性が高く、少なくとも凶作年は豊作年に比べると１か月以上早くなっていました。夏期に確認できた最高地点付近は高山植物があるところで、白山の高山帯の保全上、高山植物を食べていないか、また群れがより高度を上げていかないか、今後も注意していくことが必要と思います。なお、現地調査と結果のとりまとめは山田孝樹さん（2007 ～ 2008 年）と増田美咲さん（2009 年）とともに行い、これは研究報告第 36 集に発表したものを書き改めたものです。

白山の歴史時代の噴気活動

東野外志男（石川県白山自然保護センター）
田島　靖久（日本工営（株）福岡支店）

白山は現在の山頂部で噴火を開始したのが３、４万年前で、歴史時代にも何度も噴火したことがあり、活火山に分類されています。最も新しい噴火は 1659 年（万治二年）で、その後 350 年ほど噴火していませんが、将来噴火を再開する可能性のある火山です。現在、山頂部では火山ガスの放出などの表面的な活動はみられませんが、1659 年の噴火から後、ずっと現在のように表面的に静かだったのでしょうか。それとも、時には火山ガスの放出などの現象が見られたのでしょうか。江戸時代には山頂部の火口附近を訪れるのを地獄巡りといっていましたが、どのようなところを歩いていたのでしょうか。江戸時代後期から大正末頃にかけての紀行文や地誌などを調べてみると、多くはありませんが“硫黄が出る”や“硫黄の気がある”などのように、硫黄を伴った噴気活動が山頂部で起きていたことを示すものがあります。それらを知ることは、白山火山の活動の歴史を知る上でも重要なことです。今回は、それらのうち代表的なものを紹介しましょう。

朝暾洞（あさひのほら）での硫黄の吹き出し

朝暾洞はこれまで聞いたことのない地名だと思いますが、この場所（もしくはこの付近）での噴気活動については金子有斐（かねこありあきら）の書物にでています。金子の号は鶴村 (かくそん) で、一般には金子鶴村の名のほうが知られているでしょう。金子は 1759 年に旧鶴来町に生まれ、1840 年に金沢で亡くなっています。白山は天下の名山であるが、地誌がなければ名山といえないということで、『白嶽図解』や『白山史図解譜』、『白山遊覧図記』などを著しています。金子は白山に何度か登っており、初めて登ったのが 23 歳の時です。彼の著書は自分の実地見分に加えて、古い書物や地元民などから多数の情報を得ているのが特徴です。朝暾洞での活動については、上記の３書にほぼ同じ内容のことが書かれており、ここでは『白山史図解譜』に書かれている記事を次に示します。

“千歳谷の上の地は平坦な所で、石地蔵六体が置かれている。俗にいう六道地蔵である。ここより於本彌左岐（おほみさき）を上がる。すすむこと一町ばかりのところに洞があり、朝暾洞という。洞口は西から東へ通じる。そのため、朝日の光がまずこの洞に映る。俗に言う胎内久具里 (たいないくぐり) である。伝えるところによると、元禄九年 (1696) 八月に洞の中で五日間鳴動した。硫黄によって煙火が生じた。砂や石はことごとく火になり、緑碧池（翠ヶ池）を直射した。池の水はこのため沸騰、混濁したと云う。その後、はげしい風が洞を二つにひきさいた。”という記事です (本文で使用した史料は全て現代文で示し、一部省略した部分もある)。

千歳谷（千才谷）は湯の谷川支流のことで、最上流部に千蛇ヶ池があり（図１）、千蛇ヶ池とほぼ同じ意味で使われています。地蔵が六体おかれた場所は、千蛇ヶ池の南南東約 100 mのところ（図１の六道地蔵堂跡）で、明治の初め頃まで地蔵堂がありましたが、現在石積みの石垣などが残されているだけです。当時の登山ルートがはっきりしていないので、朝暾洞の正確な位置も不明ですが、於本彌左

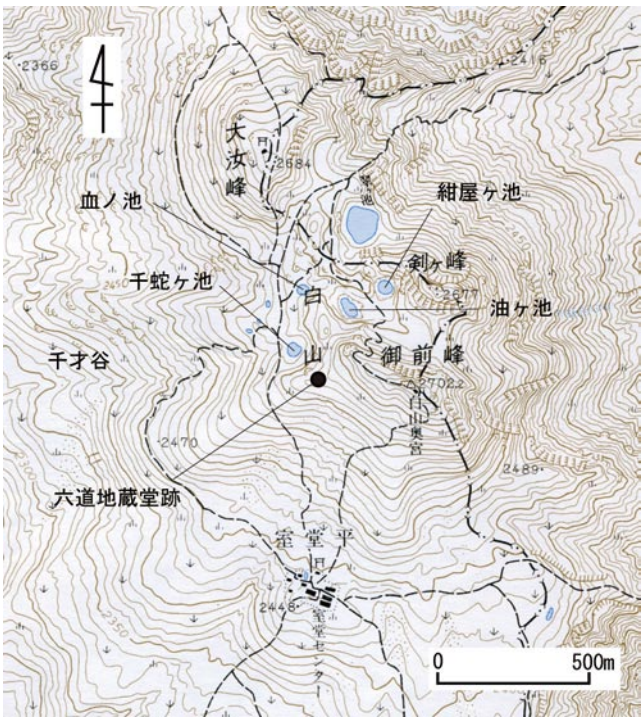

図１　白山山頂部の地形図
国土地理院 1:25,000 地形図「白山」(平成９年９月１日発行) を使用。紺屋ヶ池・千蛇ヶ池・油ヶ池・血ノ池・千才谷・六道地蔵堂跡の地名は新たに加えた。

岐（おほみさき）は御前峰のことをさし、胎内くぐりについての他書の記述などを参考にすると、御前峰の山頂近くにあったと思われます。ただし、『白山総覧図記』に朝暾洞が大汝峰中腹にあるという記述もあり、今後、現地調査や他の史料からの検討を行い、どちらが正しいか明らかにする必要がありますが、御前峰の可能性が高いと考えています。

上の文書では、“硫黄によって煙火が生じた”となっていますが、『白嶽図解』では“硫黄を吹き出した”、『白山総覧図記』では“硫黄が自焼”と記されており、多少表現が異なりますが、勢いよく硫黄が吹き出ていたと考えられます。また、活動場所は朝暾洞となっていますが、『白嶽図解』では、朝暾洞の近くの“洞穴“で起きたと記されています。この活動に伴って、砂や石（硫黄も含んでいたか？）が翠ヶ池まで届いたということですから、活動としては活発なものだったと推定されます。

1950年代に書かれた白山の案内書には、御前峰山頂近くの天柱石のそばに、硫黄の塊が産出することが記されています。2007年には御前峰稜線のほぼ中央あたりで、最大で1cmを超える硫黄の結晶が極微量ですが存在していることが確認されています（詳細は本誌第37巻第2号「白山山頂部にできた溝(ガリー)」に掲載）。上に紹介した活動が御前峰で起きたとすると、これらの硫黄の結晶は、1696年の活動によるものかもしれません。

写真１　白山山頂部の火口群
左の峰が剣ヶ峰(2,677m)、その右上の峰が御前峰(2,702m)。手前の大きな池が翠ヶ池、その左斜め上の池が紺屋ヶ池、右の真ん中あたりの池が血ノ池の各火口で、これらが分布するあたりのくぼ地を江戸時代には地獄谷といっていました。1999年9月21日上空から撮影。

『白山草木誌』に記された硫黄の気

『白山草木誌』は紀伊藩の畔田伴存（くろだともあり）(号は翠山(すいざん))（1792-1859）の書で、1822年（文政五年）に白山に登った記録をもとに作成されたものです。畔田は福井から勝山を経て市ノ瀬から白山へ登り、帰りは別山を経て市ノ瀬に下山しています。その後、鶴来を経て金沢へ行き、立山にも登っています。本書は上下の２冊からなります。上は主に白山の植物について、植物ごとに特徴や産出場所などがまとめられており、白山の植物を記した最初の学術書といわれています。下は「越前國福井ヨリ白山エノ道ノ記」と題した白山の紀行文で、一名『白山記』ともいいます。「越前國福井ヨリ白山エノ道ノ記」には、次のような記述があります。

“この池（千蛇ヶ池）を過ぎて少し山に登ると、フコウ院地獄（翠ヶ池）という池が右にみえる。この池には水がある。雪と水との境は碧色をなし、すさまじい藍の色で、刀の地肌を研ぎ澄ましたようである。紺屋地獄(紺屋ヶ池)と油屋地獄（油ヶ池）も水際に雪が落下したのか、藍のようである。(中略)この辺の地はおおかた硫黄の気がある。硫黄も少し出る。”や、“奥宮（大汝峰の社）の下、采女（うねめ）の社の前より左に山を下ると、谷合より湯の花が出る所があり、その水は泥のごとく白く、硫黄の気がある。”の記事です。“硫黄の気”は硫黄の臭いがする気体状のものと考えられ、火口が分布するあたりで硫黄の臭いがしていたと思われます。『白山草本誌』の白山山頂部の図（図２）では、千蛇ヶ池を横切る道が２つあったり、翠ヶ池を取り囲むような道があったりなど、当時の登山ルートは現在とは異なっていたと考えられます。そのため、当時の登山ルートや采女の社の正確な位置が不明なので、場所の特定はできませんが、翠ヶ池などの火口湖が分布するあたりなどで、硫黄が産出したり、硫黄の臭いがしていたことが示されています。

図２　『白山草木誌』（写本）の白山山頂部の図（金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵）
御前峰（白山御本社の峰）・大汝峰（奥宮の峰）・御宝庫（御宝蔵）・紺屋ヶ池（紺屋地獄）・油ヶ池（油屋地獄）・千蛇ヶ池（緑之池ともいった）・翠ヶ池（千蛇ヶ池の上の池；フコウ院地獄・不空院地獄・怕寒（はかん）地獄といった）・白山室（宿泊所）が描かれています。右の方に、“黒百合此所ニ生“と記されています。

『石川縣天然紀念物調査報告　第三輯（白山）』に記された硫気洞

『石川縣天然紀念物調査報告　第三輯（白山）』は、1926 年（大正十五年）の現地調査をもとに翌年発行されたもので、地形・地質、植物、動物、気象など幅広い分野を含んでいます。その中の白山火山のことを記したところには、“白山の噴火は昔からしばしば繰り返してきて、御前峰と奥ノ院（大汝峰）との間には、小噴火口又は硫気洞の趾（あと）と認められる所は少なくない。（中略）現今なお火山の東側、翠ヶ池の下方には硫気洞がある。噴きだす勢いは猛烈で附近の岩石は熱で色が変わり霉爛（ばいらん；熱で色が変わりただれくさる）することがはなはだしく、かつ白山火山の東側面は一般に硫気洞のその霉爛作用を受けて、はげている所がはなはだ多く、そのため細い溪谷があわされて東流する大白川は盛んに泥土を下流地方に運ぶ”の記事があります。

硫気洞は硫気孔のことをさしていると考えられます。地図に示されていませんが、翠ヶ池などの火口が分布するあたりにあったとされる硫気洞のあとは、まわりに硫黄の結晶などがみられる穴のようなものをさしたのでしょうか。いずれにしても、火口が分布するあたりから、かつて硫黄に富むガスが吹き出ていたと考えられます。翠ヶ池下方の硫気洞は位置が地図に示されており、翠ヶ池東方で大白川支流小白水谷の最上流部のあたりだと考えられます。記述から、当時その場所で硫黄の火山ガスの吹き上がる勢いが激しかったことが想像されます。

1659 年の噴火以降も続いていた噴気活動

上に示したように、1659 年（万治二年）の後、少なくとも大正の末頃まで山頂部において、硫黄の火山ガスを伴う噴気活動が起きていたことがわかります。ただし、それぞれの活動がどれくらい続いていたのかよくわかっていません。山頂部でも噴気活動が起きていた場所は、その時によって変わってきています。1696 年の朝暾洞（もしくはその近く）での活動は、1659 年の噴火から 50 年も経っていない時期です。記述内容から活発であったと推測され、何らかの痕跡が現地に残されている可能性があります。現地調査や他の史料の調査などから、場所の確定も含め活動内容を今後検討する必要

があります。それ以外の活動は大きなものではありませんが、硫黄のガスが立ち上るなど、現在の白山とは異なる山頂部の様相が想像されます。

噴気活動ではありませんが、1813 年（文化十年）の登山をもとに著された『白山紀行』（小原益著）には、“ 大汝峰より東の方へ下り、地獄谷などいろいろおかしな名をつけたところが多い。又岩穴もあり。上古にはこのあたり所々火気があって、草鞋を重ねてはいていないと足をいためることがあるということでしたが、今はそういうことはない。” という記事があります。当時、地獄谷は翠ヶ池などの火口が分布するくぼ地をさしており、そのあたりで地熱が高かったことを示しています。上古がいつ頃をさしているのか不明ですが、現代のような科学知識がない時代に、噴火が再開するかもしれない火口付近がまだ冷えていないときに、歩いていたということは驚きでもあります。

江戸時代の頃には、翠ヶ池を初めとした山頂の火口群を訪れることを地獄巡りといい、それらの火口を地獄と称していました。1789 年（寛政元年）に制作された能美市立博物館所蔵の白山曼荼羅（図３）には、山頂部の地獄や赤い炎のようなものが描かれています。当時参詣で白山を訪れた人々は、時には微弱ですが、硫黄の臭いがする、翠ヶ池などの火口が分布するあたり (地獄谷) を歩いていたと想像されます。

大正末頃まで噴気活動が起きていたことがわかりましたが、昭和以降については、今回調べてないので明らかではありません。山頂部ではありませんが、1939 年 (昭和十年) の冬には、山頂の南西約２km に位置する千才谷にかかっている千仞滝（せんじんたき）付近で小規模な噴気孔が出現したことがあります（詳細は本誌第 16 巻第２号の「昭和 10 年の白山の異変―千仞滝に出現した “ 噴気孔 ”―」に掲載）。当時噴火の前兆かということで人々を不安がらせましたが, 噴気孔はほどなく消滅しました。

噴気活動は火山が健在であることを示す一つの証拠といえます。現在、山頂部では火山ガスの放出などの表面的な活動は見られませんが、地震波の解析から地下にマグマ溜りが存在すると推定されています。2005 年には日に何百回もの微小地震を伴った群発地震が１年間に４回発生し、白山火山に関係したものと考えられています。これらの地球物理学的な研究からも、白山が火山として健在なことが示されています。今後とも、注意深く見守っていく必要があります。

（『白山史図解譜』の原文は漢文で、現代文になおすにあたり、石川県立図書館史料編さん室の室山孝氏にご教示いただきました。）

図３　白山曼荼羅（能美市立博物館所蔵）の一部
右の峰が御前峰、左の峰が大汝峰。翠ヶ池（緑之池）、鍛冶屋地獄、紺屋ヶ池 (紺屋地獄)・油ヶ池 (油屋地獄)・千蛇ヶ池 (千歳之池) などが描かれています。赤い点線は登山道を示します。縦に真ん中あたりが切れているように見えるのは、２つの図を合わせたためです。

郵便集配の山道～昭和 28 年の郵便図を見る～

林　哲・佐川　貴久（石川県白山自然保護センター）

はじめに

昭和 30 年ころの白山麓の山々には多くの人たちが生活していました。標高 800 ～ 1,000m もある山襞 (ひだ) のあちこちに出作り耕作地があり、多くの人が住んでいました。旧白峰村には下田原川、赤谷、大嵐谷、百合谷、大道谷、大田谷、大杉谷、明谷、小又谷、風嵐谷、根倉谷、宮谷、三谷、湯ノ谷など多くの谷や川があり、その支流に沿うようにして出作り地がありました。その遠い出作り地へ郵便の集配員が行き来していました。

昭和 28 年に発行された郵便図は旧白峰村全域の集配地域の道が 1m 単位で記録された珍しい地図です。この地図は郵便集配のために利用されたものですが、反面、奥山に暮らした人たちが往来した山の道の記録と見ることもできます。この地図に記された出作り地や山の道を再考するのは白山の山村史にとって意義あることだと思います。

山道を行く集配員 (イラスト：藤川恭子)

白山麓の出作り地と郵便の集配

昭和 28 年の郵便図には旧白峰村の白峰市街地と桑島市街地の 505 戸と下田原川、赤谷、大道谷、河内谷など市街地外の 130 地区（小字数）242 戸が記されています。その内訳は河内谷・大杉谷川地域 33 地区 60 戸、赤谷川地域 22 地区 30 戸、大道谷地域 21 地区 42 戸、下田原地域 16 地区 33 戸、三谷・市ノ瀬地域 16 地区 44 戸、大嵐谷・百合谷地域 12 地区 20 戸、明谷・小又谷地域 10 地区 13 戸が記載されています。これらの地区のほとんどはいわゆる永住出作りまたは季節出作りの居住者とされており、地区数が多い地域は、それだけ出作り地が多かったことと郵便物の集配距離も長かったことを示しています。

表１　郵便集配の分類と地区数

	下田原川	赤谷川	大嵐谷	大道谷	明谷	三谷－市ノ瀬	河内谷（大杉谷）	計
周年配達	3	3	7	16	-	9	6	44
周年不配	8	6	2	-	-	-	-	16
5 月～ 11 月配達 12 月～翌年 4 月不配	5	-	-	2	9	4	3	23
周年　2 日に 1 度配達	-	-	-	-	-	-	12	12
5 月～ 11 月　2 日に 1 度配達 12 月～翌年 4 月　不配	-	11	1	-	-	-	9	21
不明	-	2	2	3	1	3	3	14
合計	16	22	12	21	10	16	33	130

白峰局郵便区図 (1962) より作成

なお、これらの地域のなかには、下田原川地域と赤谷地域の奥地には集配しない地区（13 地区 20 戸）もありました。

集配距離

それぞれの地域の基点からその地域の最奥地区までの集配した距離は下田原川では 10.2km、赤谷 14.4km、大嵐谷 9.5km、大道谷 20.6km、河内谷・大杉谷・風嵐谷など 31.9km、明谷 14.8km、三谷・市ノ瀬 18.0km でした。また、これらの距離の合計は 119.4km ありました。ほとんどの地域では集配局から奥地に行って、また集配局へ戻りますからこれらの距離の約 2 倍になります。郵便物は日によって量が異なり、各家に毎日配達する必要はなかったと思われますが、河内谷や赤谷地域のように 1 日おきに集配する地区でも集配日の 1 日あたりの距離は相当の長距離です。当時、白峰郵便局では 6 人の集配員がいたようですが、白峰本局に近い明谷でさえ片道 14.8km もあり、河内谷・大杉谷や大道谷では約 20km もありましたから、長い山道を歩いた集配員たちの苦労を想像することができます。

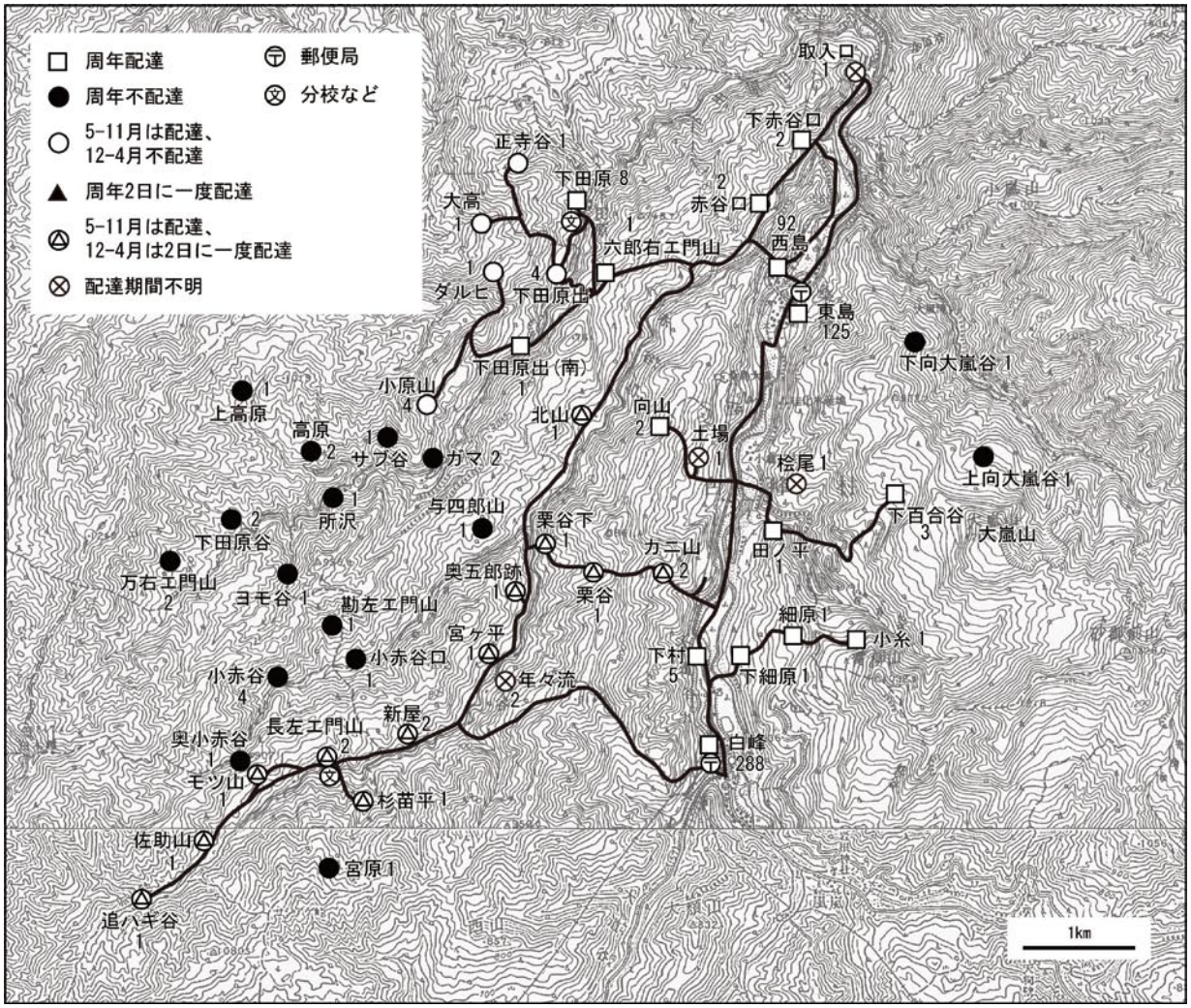

図 1　下田原川、赤谷、大嵐谷などの集配道と地区名
白峰局郵便区図 (1962) より作成。地区名の横の数字は戸数を示す。以下の地図も同じ)。

標高差

旧白峰村の 7 地域のうち、三谷・市ノ瀬、明谷、河内谷地域でもっとも標高の高い地区は六万山、大空などが約 1,000m、下田原川、赤谷地域では追ハギ谷、大高などは約 900m、大嵐谷・大道谷地域では下百合谷、尾田などは約 800m の標高がありました。集配起点の標高は下田原川地域、赤谷地域、大嵐谷地域では約 400m、大道谷地域、河内谷地域、明谷地域が約 500m、三谷・市ノ瀬地域が約 600m でしたから、各地の標高差は 300m から 500m もありました。

このような標高差のある山道を行き来した集配員は毎日山登りをしていたようなものです。特に河内谷や大道谷では標高差は約 500m もあり、集配員たちの苦労が想像できます。仕事とはいいながら標高差のある山道の集配は想像以上に体力が必要だったと思われます。それだけ奥山の出作り地に届けられた手紙や葉書などのありがたさは格別だったにちがいありません。郵便図で示された白峰各地の出作り地は当時の山の活力を示していると思われます。

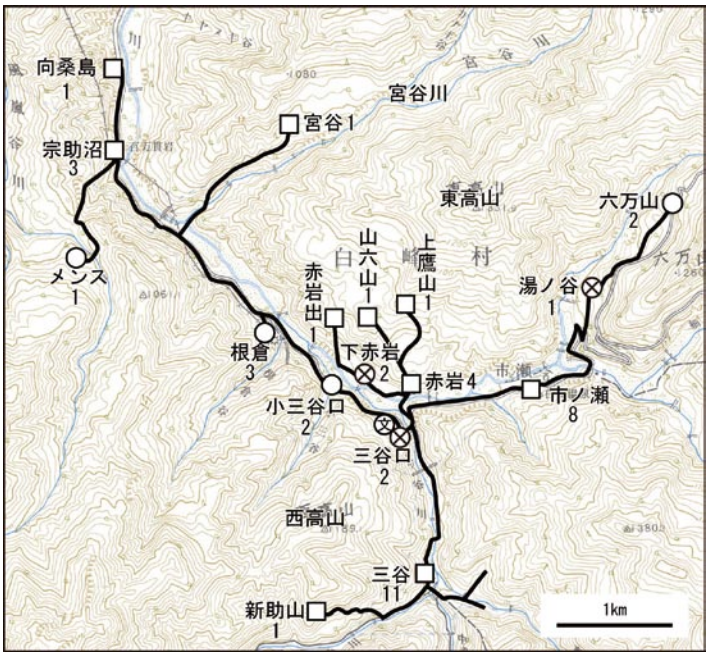

図 2　三谷、赤岩、市ノ瀬の集配道と地区名

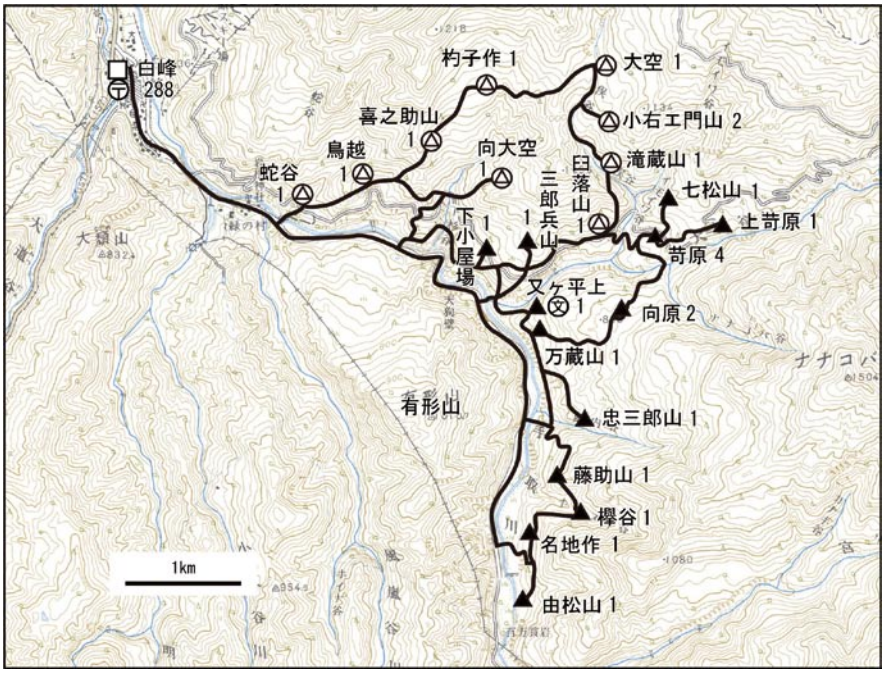

図 3　河内谷、大杉谷の集配道と地区名

集配員の記憶

16 才のときから約 60 年間集配用務をしていた K さんにその様子を聞かせていただきました。K さんは「コマ山」（郵便図 2 の向桑島）で本局からの郵便物を受け取り、ここから三谷、赤岩、市ノ瀬を経て六万山まで行きました。この地域で六万山、根倉、小三谷口、メンスの 4 地区 8 戸以外の 12 地区 36 戸を周年にわたって毎日配達しました。積雪期はスキーにアザラシのシールをつけて配達しました。この地域では三谷の林さん、赤岩の加藤さん、市ノ瀬の永井さんの各家では新聞をとっていましたので周年にわたり毎日配達していました（この地域は新聞も郵便集配員に委託されていました）。

標高 1,000m の六万山の営林署は春から秋の間、毎日届けていました。この地域の標高差は標高 600m のコマ山から六万山までは 400m 以上もあり、距離は往復約 30km もありました。配達には幅 40cm、高さ 20cm の牛皮のカバンに郵便物を入れて運搬しました。カバンは約 1kg ありましたので郵便物をいれると数 kg 以上になることもありました。夏は足（脛の部分）に脚はんを巻き、地下足袋をはいて集配しました。昭和 30 年頃、「コマ山」の集配所に公用の自転車が置いてありましたが、当時は道が悪く、押して行くことが多かったといいます。

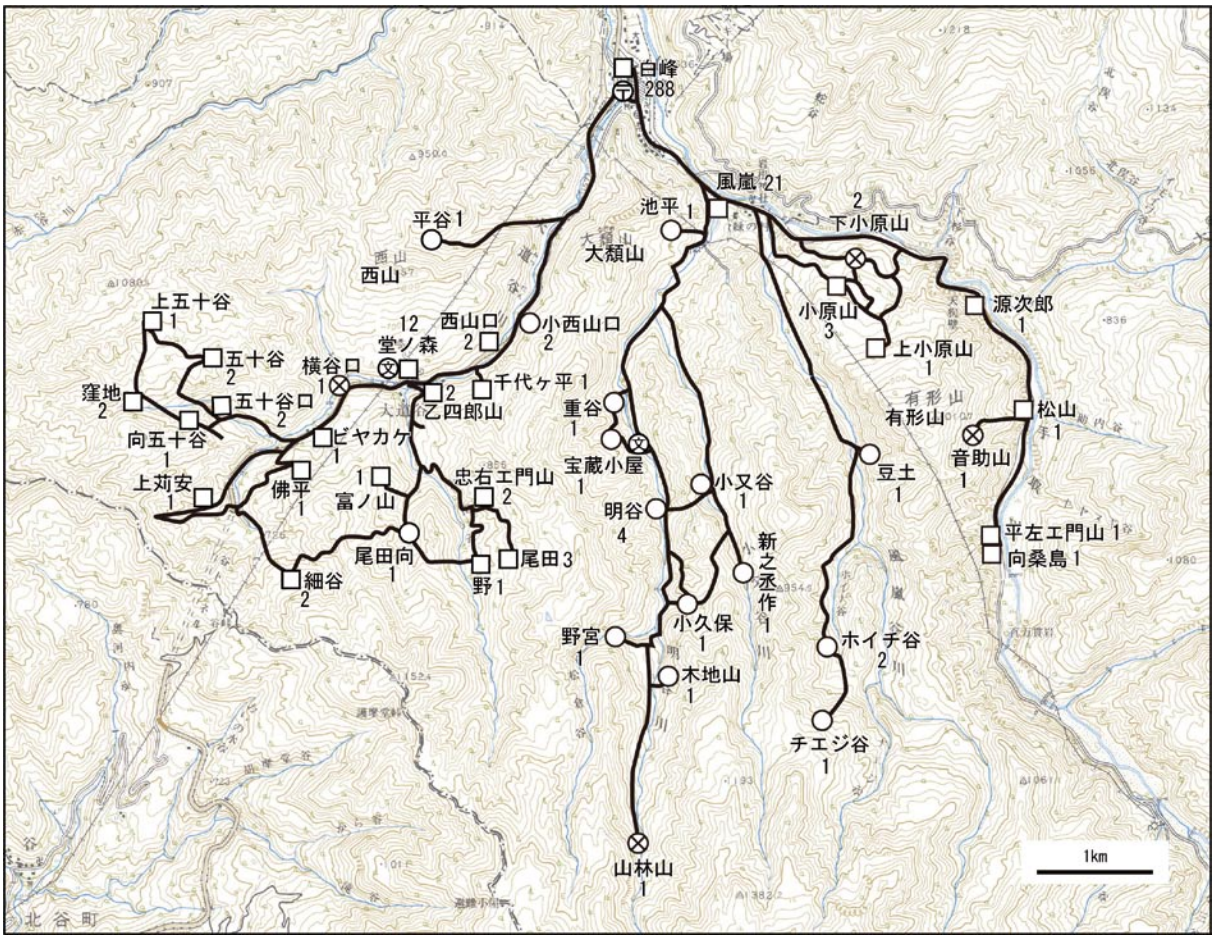

図 4　大道谷、明谷、風嵐谷などの集配道と地区名

郵便図と山の道

昭和 28 年の郵便図は当時の白峰村の山間地にたくさんの居住者がいたことを示しています。その後、昭和 40 年ころから、日本の山村環境は激しく変わり、その 20 年後に作成された「郵便図」(昭和 48 年発行) では、地区数は 45、戸数は 108 に減っています。地区数は約 65％、戸数は約 55%の減少です。それからさらに約 40 年経過した今、この郵便図に記載されていた「山の家やムラ」はそのほとんどが消失してしまいました。また。この出作り地に網目のようにつながっていた山々の道も草木に埋もれ、そのほとんどは見る影もありません。

山の家が 1 戸抜け、2 戸抜けて居住者がいなくなっていく過程は山村が過疎化していく姿ですが、昭和 35 年ごろからはじまる日本の高度経済成長は、日本各地の農林業従事者を都市部に集め、日本各地の山や村の生態系に変化をもたらしました。現在起きている日本各地の農山村の耕作放棄地の増加と獣害の激化現象はその結果だと思われます。

白峰村の「郵便図」は当時の集配員や山々に暮らした人たちが歩いた山道を示していると同時に白山麓の山村の様子がわかる貴重な資料だと思います。

はくさん　山のまなび舎だより

ブナオ山観察舎のキャラクター・かもちゃん

白山まるごと体験教室　かんじきハイキング

イヌワシも見えた！冬の自然を満喫

2月20日、白山市一里野のブナオ山観察舎で家族連れら30名が参加して行われました。雪原がまぶしい快晴の下、かんじき体験や野生動物観察などで冬の自然を満喫しました。

参加者はかんじきをはき、白山自然ガイドボランティアや白山自然保護センター職員らの案内で約1km離れた「ハンノキの広場」までを往復しました。3mを超える積雪も硬くしまって歩きやすく、ニホンカモシカ3頭をはじめ、つがいで飛ぶイヌワシも観察されました。ノウサギ、リスなどの足跡のほか、猛禽に襲われたとみられるモモンガの足の一部なども見つかり、参加者の関心を集めました。ハンノキの広場では雪の山々を眺めながら弁当を食べ、子どもらは尻滑りを楽しみました。

かんじきをはいて雪原を進む参加者

イヌワシに目を凝らす

白山自然ガイドボランティア　第3回研修講座

昨年12月4日、石川県文教会館でガイドボランティアの平成22年度活動のふりかえりなどが行われました。石川きのこの会の米山競一さんが県内のミズナラ枯れの現況と立ち枯れに発生するキノコについて講演した後、今年度の活動結果報告と来年度に向けての意見交換が行われ、活動地域内の倒木の有効利用なども話題にあげられました。

米山氏のキノコの話に聞き入る
ボランティアの皆さん

伝えてみませんか！楽しさいっぱい、白山の自然
白山自然ガイドボランティア養成講座　第4期生募集

白山自然保護センターは、中宮展示館や市ノ瀬ビジターセンターなどを拠点にガイドウォークなどの自然体験プログラムを実施しています。5月～7月にこの活動のお手伝いをしてくださるボランティアを養成します。白山の自然を愛する皆さん、自然の素晴らしさを伝える活動に参加してみませんか。

観察路で素材を探すガイドボランティアの皆さん

対象：大人（全3回の講座に参加でき、ボランティアとして自然体験活動に従事してくださる方）
日程：①5月21日（土）～22日（日）
②6月12日（日）　③7月2日（土）
集合：①白山国立公園センター（白山市白峰）
②中宮展示館（白山市中宮）
③市ノ瀬ビジターセンター（白山市白峰）
定員：30名
参加費：実費負担（①の宿泊・食事など）
募集：3月22日（火）から
申し込み・問い合わせ：石川県白山自然保護センター
電話（平日8:30～17:00）・Fax・メールで
〒920-2326　白山市木滑ヌ4
TEL 076-255-5321　Fax. 076-255-5323
E-mail. hakusan@pref.ishikawa.lg.jp

白山のシンボルマーク

平成23年度石川県白山自然保護センター開催事業

いしかわ自然学校「山のまなび舎」

■白山まるごと体験教室　「白山を心と体で体験しよう」要申込（約１か月前から電話で受付、先着順）

	日　時	タイトル	内　容	場　所（集　合）	定員
①	4月24日（日） 9:00-15:00	早春の花 カタクリ大群落に出会う	ピンクのじゅうたんをしきつめたようなカタクリなど春植物を観察し、早春の蛇谷自然観察路を散策。	白山市中宮 （中宮展示館）	30
②	7月31日（日） 9:00-15:00	太古の白山を化石で探る	川原の化石や石ころを観察し、太古の白山や生い立ちについて考えてみませんか。	白山市瀬戸（尾添川） （白山自然保護センター本庁舎）	30
③	8月28日（日） 9:00-15:00	隠れた巨石三ツ石のイワナと水生昆虫観察	岩屋俣谷の巨石とイワナや水生昆虫など川の生き物にふれてみよう。	白山市白峰（岩屋俣谷） （市ノ瀬ビジターセンター）	30
④	9月23日（祝） 9:30-14:30	木の実の観察と菓子作り	クルミの入った地元中宮の郷土菓子”ねんぐぁじ”を作り、中宮の民謡を楽しみます。	白山市中宮 （中宮温泉野営場）	30
⑤	10月2日（日） 9:00-15:00	トチノキ観察と トチモチ作り	トチノキの観察と実をトチモチとして食べるまでの苦労を少しだけ体験します。	白山市白峰（チブリ尾根） （市ノ瀬ビジターセンター）	30
⑥	10月16日（日） 10:00-15:00	アケビのつるでカゴ作り	アケビの観察とアケビのつるを使って、ぬくもりのある素朴なカゴを作ります。	白山市中宮 （中宮展示館）	30
⑦	11月20日（日） 10:00-15:00	イヌワシを見つけよう	双眼鏡や望遠鏡を使って、大空を飛んだり、木に止まっているイヌワシを探します。	白山市尾添（一里野） （ブナオ山観察舎）	30
⑧	2月19日（日） 10:00-15:00	かんじきハイキング	雪の山を「かんじき」で歩きながらカモシカやニホンザルを見つけよう！	白山市尾添（一里野） （ブナオ山観察舎）	30

※④⑤を除き参加費無料、④は参加費１人300円、⑤は参加費１人500円

■白山麓里山・奥山ワーキング　「白山をみんなで守ろう」
要申込（①～③５月26日から電話、FAX、E-mailで、④約１か月前から電話で受付、先着順）

	日　時	タイトル	内　容	場　所（集　合）	定員
①	6月26日（日） 13:00-16:00	白山まもり隊－採って楽しむオオバコ茶－	市ノ瀬の駐車場のオオバコの除去作業。採ったオオバコをお茶にして楽しみます。	白山市白峰（市ノ瀬） （市ノ瀬ビジターセンター）	100
②	8月20日（土） ～21日（日）	白山まもり隊－白山外来植物除去作業 in 室堂－	白山に侵入してきたオオバコやスズメノカタビラなどの外来植物（低地性植物）の除去作業をおこないます。	白山　室堂 （白山室堂）	50
③	9月3日（土） ～4日（日）	白山まもり隊 －白山外来植物除去作業 in 南竜ヶ馬場－		白山　南竜ヶ馬場 （南竜ビジターセンター）	50
④	10月30日（日） 13:00-16:00	白山麓柿もぎ隊	柿もぎ作業を通して、人とサル・クマなど野生動物との関わりについて考えよう。	白山市内 （未定）	50

※①④参加費無料、②③は参加費１人4,000円

■県民白山講座　「白山を知ろう」　①は４月15日から、③は５月13日からそれぞれ電話で受付　②は申込不要

	日　時	タイトル・会　場	内　容	定員
①	5月15日（日） 13:30-17:00	白山の高山植物とライチョウの保全 いしかわ動物園 動物学習センターレクチャーホール	白山の高山帯では高山植物が生育し、ライチョウが見つかっています。その高山帯について紹介するとともに高山植物やライチョウの域外保全の必要性について紹介します。	70
②	6月18日（土） 13:30-17:00	白山登山と高山植物の集い 白山市民交流センター	白山の夏山シーズンを前に白山登山の心得や白山の自然について紹介します。また、白山登山や自然に関する最新の資料を配布するほか、登山相談を受付けます。	200
③	7月13日（水） 13:30-15:30	白山の魅力 - 高山植物と野生動物 - 石川県立生涯学習センター 能登分室	石川県民大学校能登校で実施している石川県の歴史・文化・自然・産業について学ぶ「いしかわを知る講座」の講座の１つとして開催。白山の高山植物や野生動物について紹介します。	40

※参加費無料、ただし、①はいしかわ動物園への入園料　一般１人810円、中学生以下400円が必要です。

センター主催行事のお知らせ

白山まるごと体験教室

早春の花カタクリ大群落に出会う

日程：4 月 24 日 (日)
9:00 ～ 15:00
集合：中宮展示館　（白山市中宮）
定員：30 名
内容：ピンクのじゅうたんをしきつめたようなカタクリなど春植物を観察し、早春の蛇谷自然観察路を散策します。

白山麓里山・奥山ワーキング

白山まもり隊
－ 採って楽しむオオバコ茶 －

日程：6 月 26 日 (日)13:00 ～ 16:00
集合：市ノ瀬ビジターセンター
（白山市白峰（市ノ瀬））
定員：100 名
内容：市ノ瀬の駐車場のオオバコの除去作業。採ったオオバコは、お茶にして楽しみます。

県民白山講座

白山の高山植物とライチョウの保全

日時：5 月 15 日 (日)13:30 ～ 17:00
会場：いしかわ動物園 (能美市)
動物学習センター
レクチャーホール
定員：70 名
内容：白山の高山帯で生息するライチョウや高山植物とそれらの域外保全について紹介します。

白山登山と高山植物の集い

日時：6 月 18 日 (土)13:30 ～ 17:00
会場：白山市民交流センター
（白山市倉光）
定員：200 名 (申込不要)
内容：白山の夏山シーズンを前に白山登山の心得や白山の自然について紹介。また、白山登山や自然に関する最新の資料を配布するほか、登山相談を受付けます。

申し込み・問合せ　　白山まるごと体験教室、白山麓里山・奥山ワーキング・県民白山講座「白山の高山植物とライチョウの保全」は申し込みが必要です。詳しくは石川県白山自然保護センター（076-255-5321）まで。

ブナオ山観察舎　春はクマ観察の名所に

白山市一里野にある「ブナオ山観察舎」には県内外から多くの自然愛好者らが訪れ、野生動物の観察を楽しんでいます。

ニホンカモシカ、ニホンザル、イノシシ、イヌワシ、クマタカなど、お馴染みの顔ぶれのほか、近年は 4 月中旬になると冬眠明けのツキノワグマを目当てに訪れる人も多く、クマ観察の名所の観があります。土日、祝日には、雪さえあれば、かんじきをはいて観察舎周辺の散策や尻滑りを楽しむミニ観察会を行っています。 5 月 5 日まで開館中。

若草を食べるツキノワグマの親子

雪崩跡の草地を掘り返すイノシシ

センターの動き（12 月 18 日～ 3 月 18 日）

12.20、2.22　ジオパーク部会 (1 回、2 回)　（金沢市）
12.21　特定鳥獣（ツキノワグマ）ワーキング会議　（県庁）
1. 5　ライチョウ展示打ち合わせ　（能美市）
1.13　モニタリングサイト 1000 高山帯調査　第 2 回検討会（東京）
NHK テレビ放送「はくさん季節のたより」出演　（本庁舎）
1.14　県民大学校実施機関連絡協議会　（金沢市）
1.20　輪島市西保小学校かんじき体験　（ブナオ山観察舎）
1.23　ボーイスカウト金沢 6 団　（ブナオ山観察舎）
1.25　白山山頂遺跡群調査委員会　（白山市）
2. 2　和牛放牧事業打ち合わせ　（野々市町）
2.2、3.8　白山国立公園重点整備事業検討委員会（2 回、3 回）（金沢市）
2. 5　ののいち自然教室　冬の野生動物の観察
（ブナオ山観察舎）
2.12　里山支援事業 (山笑い）協力　（白山市木滑）
2.17　NHK テレビ放送「はくさん季節のたより」出演（本庁舎）
2.20　白山まるごと体験教室「かんじきハイキング」
（ブナオ山観察舎）
2.22　白山国立公園生態系維持回復事業検討会　（県庁）
2.25　いしかわ自然学校運営協議会　（金沢市）
温暖化適応地域ワークショップ　（東京）
3.8 ～ 3.11　日本生態学会　（北海道）
3.12　石川県自然解説員研究会総会　（金沢市）
3.17　白山国立公園コマクサ対策検討会　（金沢市）

編集後記

普及誌「はくさん」の表紙執筆を担当して 2 年。今まで見過ごしてきたこと、なんとなくしか見てこなかったことをじっくり見るようになりました。その中で、どの生物も生きるために努力をしていることをあらためて感じました。自分では動けない植物も長い年月を通して進化し、子孫を残すために工夫を重ねてきたのです。今回ご紹介したヤドリギ。「ちゃっかり者」と表現しましたが、その言葉の奥にはヤドリギの生きる努力に対する尊敬、そして愛着をつめこんだことが、読者のみなさんに伝わりますように。　(吉本)

はくさん　第 38 巻　第 4 号（通巻 158 号）
発 行 日　2011 年 3 月 18 日（年 4 回発行）
編集発行　石川県白山自然保護センター
〒 920-2326　石川県白山市木滑ヌ 4
TEL.076-255-5321　FAX.076-255-5323
URL　http://www.pref.ishikawa.lg.jp/hakusan/
E-mail　hakusan@pref.ishikawa.lg.jp
印 刷 所　前田印刷株式会社